

AIIT PBL の隠れたメタコンピテンシー

創造技術専攻 教授 海老澤伸樹

私は、ある自動車会社において、長い間様々なポジションで自動車デザインや商品企画開発の実務に携わってきました。その経験を活かして、2016年6月からこのAIITに創造技術専攻のインダストリアルデザイン分野における実務型教員として着任し、その後約半年間、副担当として二つのPBLに関わる経験を持ちました。短い経験ですが、やや外部的な視点から、このAIITの特徴であるPBLについて人材育成という視点で考えてみたいと思います。

もちろん学生や企業が、実務教育を主眼としたこのAIITのような専門職大学院に期待することは、自らの業務における新たな活動に直接役立つと考えられる個人の能力の向上、すなわち新たな知識やスキルの獲得などが第一義であろうと考えられます。そしてこのPBLも、これを修了することで様々なコンピテンシーを獲得できるように設計されています。しかし、私はもう一点このPBLを通じて、学生が現実の企業や社会の中では体験し難くなった経験を積むことができることに気がつきました。それは失敗とその克服の体験です。

AIITのPBLでは企業における現実的なプロジェクトと幾つか異なる点があります。まず他大学や企業内よりも職業、年齢、国籍など多様な価値観の学生によるメンバー構成です。AIITは社会人を主な対象としつつ、大学からの卒業生や留学生なども受け入れています。年齢やそれまでの社会での経験値、その専門分野、時には文系出身者もいるなどそれまでの学習経験も異なります。更に一つのPBLに3名の教員がお互いにクロスするような形で指導を担当します。教員の構成は異なる深い専門領域を持った研究型の教員だけでなく、専門職大学院として、私のような企業経験がある多様な実務型教員が在籍しています。このような非常に異質で多様なグループメンバー構成で、更には学生自身で自律的に定めなければならないゴール、基本はあるもののテーマによっては雛形のない進め方、そして企業プロジェクトのような決定責任者としての上司の不在などです。学生はその多様性に関わらず、基本的にはフラットな関係で構成されるので、本当の意味での一人の最終決定責任者は存在しません。教員も学生の主体性を重視して様々なアドバイスは行いますが、学生の自主性を尊重し決裁はしません。このため学生は交代でプロジェクトマネージャーを勤めてプロジェクトを進めていきますが、当然のように価値観や想いの異なる全員の意見の集約が難しく、様々に迷走することになります。

当初、私は企業的な感覚でこの迷走状態に内心で非効率さを感じていましたが、時間が経つにつれてこの迷走に意味があると気がつきました。個々の様々な失敗の中で、時にはチームが分解しそうにもなるのですが、メンバーが相互に自然とその役割を入れ替えたりしながらもなんとかその失敗をリカバリーしているのです。こういった個人とチームが様々なレベルでの失敗と克服を経験しながら、1年後の発表会に向けてなんとかプロジェクトが前進していきます。この経験が、実はスキルの獲得とは別の観点で学生を大きく成長させます。

私の企業経験から言うと、現在の企業の若手社員は非常に優秀なのですが、やや保守的で脆い印象があります。優秀であればあるほど幼い時から成功体験を積み重ねてきていて、挫折や失敗の体験があまりないことがその一つの要因ではないでしょうか。失敗したことがないためにその乗り越え方がわからない。そのため失敗を恐れて確実性を選択し、結果チャレンジしなくなるというパターンです。確かに企業も成果主義や効率化でなかなか失敗を許容しないような状況になっているのも事実です。ただ実際にはいくらかでも挽回できる機会はあります。しかし自分自身で失敗の乗り越え方をわかっていないために、一度失敗するとそのまま挫折してしまう若者も結構見受けられます。また最近の企業の高効率体質化の中では実務でのプロジェクトで失敗することは致命的になってしまうという側面もあります。

現在は企業側、社員側双方から失敗できない、失敗しないという傾向が非常に強くなっているように感じる部分もあります。こういった点も現状の日本企業のクリエイティブ性の喪失やダイナミズムを損なっている一因かもしれません。必要なのは未知なるプロジェクトに挑戦し、その過程で様々な失敗を経験し、それを克服した体験を身体的に記憶していることではないでしょうか。この経験と自信が新たなことに恐れずチャレンジしていく気概を育てていきます。そして困難の末になんとかこぎつけた最後の発表会における達成感。これらの経験が、社会においても実際のプロジェクトで失敗を恐れずに新たな挑戦をおこなっていく自信をもたらすでしょう。この観点からは、AIITのPBLは今の日本の企業内において求められるタフな人材を育成する一つの可能性があります。

前述のように、AIITのPBLは学生達が様々なコンピテンシーを獲得できるように考慮されて設計されています。これらはコミュニケーション能力などの、どのような場においても必要とされる汎用的なメタコンピテンシーから、例えば開発力のような個人の能力としてのコアコンピテンシーまで機能的に整理されています。しかし実は、ここには記されていない、この失敗とその克服の体験こそがAIITのPBLによって獲得できる隠れたメタコンピテンシー かもしれません。